心あったかニュース

ワクワクの水族館

利用者がいなく、存続の危機からV字回復した、水族館。「竹島水族館」が、ネバーギブアップという言葉もついて、テレビドラマになっているようです。２０１８年に、激レアさんをつれてきた」という番組で、２０１８年放送されています。愛知県蒲郡市の小林龍二さんが、激レアさんです。祖父が漁師で、子供の頃から水族館の飼育員になることを夢見て、大学で、水生生物について学び、地元の竹島水族館に就職します。夢が叶えたのに、竹島水族館は、老朽化が進み、3分で1周できるほど狭く、お客さんが来ない状態で、アシカショーの案内をしてもお客さんが来ないので、数人のお客さんに直接お願いして観てもらっていたそうです。他の飼育員は、好きな魚の飼育・研究をして給料をもらえるので、お客さんがどうすればたくさん来てくれるかまで考えない。閉鎖寸前で、先輩の飼育員たちは、辞めていったため、小林さんは主任に昇格しました。

小林さんは、大学生の時、鳥羽水族館に勤務していた中村元さん（現在フリーの水族館プロデューサー）から、「魚の魅力を人に伝えることができなかったら、飼育員として失格だ」と言われたことを、まさに実行していきます。お魚の解説文を手書きにします。

図鑑に載っていることではなく、水族館にはそれまで書いていなかった、食べたら、美味しいか？小林さんがお客さんの会話からヒントを得て、お客さんが求めているものに、近づけた努力です。ふれあいプールもお客さんからの要望からですが、予算がないために、

地元、三河湾で豊富に水揚げされる深海生物、世界最大のカニ、タカアシガニのタッチングプール。タカアシガニに触るのは危ないのでは」「足がもぎ取られてしまったらどうするんだ」など反対の声があるなか、。地元の漁師から頻繁にタカアシガニが持ち込まれることを活かし、たくさんいるタカアシガニを交代制にしてストレスを減らすというアイデアで日本唯一のタカアシガニの「さわりんプール」が実現した。失敗するアシカショーが逆に受けるという、逆転の発想もあり、超グソクムシ煎餅、超ウツボサブレなどなんだろう？と思わせる

オリジナルの土産もあるとか。いまや、年間４０万人が訪れる人気の水族館になり、小林さんは小林龍二さんは２０１５年４月に館長となり、さらに、２０１８年７月に人間環境大学の客員教授に就任しています。（テレビ放送激レアさんを連れてきた参照）

編集後記

お金をかけずに、V字回復させた手法には驚きと、ワクワクがありますね。飼育員さんが一番お魚の魅力を知っているから、伝えられることができる。でも、知りたいこと、興味があることは、飼育員さんと普通の人は違う。そこの距離を縮めるために、お客さんの会話を聞いて、寄せていったことと、アイディアはとても楽しいなと思いました。お魚も人もどっちも好きなんだなと思えますね。